

浜松医科大学医学部の 小論文、面接入試

浜松医科大学入学者選抜方法研究委員会

はじめに

浜松医科大学（以下本学という。）では、共通第1次学力試験が実施された昭和54年度を機に、第2次試験において、学力検査（数学Ⅰ、ⅡB、Ⅲと英語B）、健康診断と調査書の他に、小論文と面接が加えられてきた。この選抜方法は以後昭和59年度まで変わらず行われているが、その評価内容は最近徐々に改善されてきている。すなわち、本学では昭和50年9月に教育担当副学長を委員長とする入学者選抜方法研究委員会（入選研）が設置され、入学者選抜方法改善のための調査・研究を行い、その結果は実際の入学試験にも反映されてきている。昭和54年度以降、入選研ではとくに調査書、面接、小論文の評価方法、ならびに第1段階合格者数の入学定員に対する倍率の妥当性等についての調査報告を行ってきた。

以下では、大学入試センターからの要望により、本学における小論文と面接について、当初の実施趣旨およびそ

の後の変遷の概要を事例紹介として報告したい。

小論文と面接等実施の経緯

共通第1次学力試験の実施に先立ち、本学における第2次試験はどのように行われるべきであるかについて、昭和52年3月に入試第2次試験実施方法等検討委員会（委員長・吉利学長）が設置され、「医学関係第2次試験のあり方（試案）、国入改第104号」等を資料として、各教官への2度にわたるインタビュー調査とアンケート調査を行ない、それらを集約して同検討委員会による本学入学者選抜方法に関する第1次試案が昭和52年7月に報告された。それによると、「本学における入学者選抜は、①共通第1次学力試験、②第2次学力検査、③面接＋小論文（または面接あるいは小論文）＋高校調査書＋健康診断書の3者を総合し、判定するものとする。」とある。そして、その具体的内容は

1 共通第1次学力試験の成績等によ

り、定員(100名)の3倍程度の第1段階の選抜を行う。

2 第1段階の合格者については、その結果を第2次試験の実施20日前に公示する。(このことは、全国的な日程から実施不可能となった。)その方法は「学内掲示」および「本人通知」による。

3 第2次学力検査における指定科目は、英語Bおよび数学(出題にあたっては、数ⅡB、数Ⅲを主とし、数Ⅰも含む)の2教科2科目とする。

4 面接: 本学においては、受験生の適応資質を検する方法として面接を重視する。面接は「知能」と「人格・態度」に関する事項に重きをおき、明らかに本学に、また将来医師として、不適応と認められる者をチェックする。

5 小論文: 小論文(800字、配分時間60分)を課す。内容は、一般社会常識問題、総合的なものとする。

6 調査書と健康診断は、本学が在来使用してきた方法に準じて活用するものとする。

そして、これを基に、上記検討委員会の中に設置された、問題、面接、論文、適性研究の各専門委員会でさらに各細目にわたった具体案が検討されることになった。一方では、同年12月24日と25日には共通第1次学力試行テストが実施されたので、その内容をも検討しながら、各専

門委員会の案文が決定されていった。これらの決定をまって、昭和53年5月に、昭和54年度入試第2次試験実施についての同委員会案が教授会に報告され、同6月の教授会において現行の選抜方法が決定公表されるにいった。このようにして、本学の入学者選抜に関する基本方針が決定されたのであった。

小論文と面接のあらまし

小論文は、共通1次試験におけるマークシート方式を補完することを目的として、第2次試験日程の第1日の最後の60分に800字以内に文章をまとめさせるもので、第1回を除いて、それぞれ文章または資料を読ませて、予め用意したテーマについての見解を受験生に書かせている。そのテーマは第1回から順に、

54年: 「私の長所と短所」について具体的な例証をあげてまとめよ。

55年: 「科学者とあたま(寺田寅彦著、岩波書店)の冒頭部分」を読んで、「科学者とあたま」という題について意見をまとめよ。

56年: 「物理学とは何だろうか(朝永振一郎著、岩波書店)の一部」を読んで、「科学はいいものであるか悪いものであるか」について考えをまとめて述べよ。

57年: 「変痴気論(山本夏彦著、中央公論)の一部」を読んで感想をまとめよ。

58年: 「人間はどこまで動物か—新しい人間像のために—(アドルフ・ポルトマン著、高木正孝訳、岩波新書)の一部」と、「年齢別人口と将来人口に関する付表」を参考にして、「高齢化社会とそこで果たす医師の役割」について意見を述べよ。

というものであった。その評価は、国語力と論理性について予め定められた六つの項目に分けて行うが、各々採点基準を定め、各項目につき複数の教官が採点して偏りを排除するという方式を採っている。従って、採点者は各々全論文を読むことになる。

面接は、将来健全な医師たりうるかどうかの適性について、その適性を欠く者を検することを本来の目的とするが、受験生の性格傾向を把握し、入学後の学生指導の資料とすることも2次的な目的としている。その方法は、第2次試験の第1日の初頭に行う60分間の心理テスト(性格テスト・文章完成テスト)と調査書を資料として、試験第2日目に6グループに分かれて、複数名の面接官によって、受験生1人当たり約7分間で行うというものである。その際、身体的・精神的疾患が疑われる場合には精密検査を行うことがある。面接の評価は、五つの項目に

分けて予め定められた基準に基づいて行うが、その判定基準については、その後入選研での検討をもとに種々改善されているので、また後で述べることにする。

小論文の問題点とその改善

小論文を課すことの目的はマークシート方式を補完することであり、これによって受験生の国語力と論理性および医師としての適性を検しようとするものであるが、その評価結果を積極的に点数化して採用しようとする本学の方法に問題点がないわけではない。それは、与えられた課題に関する文章から、受験生のその能力をどこまで客観的に評価できるかという点である。初年度のような形式の課題によれば、練習度による差の方が大きく現われたり、生活経験の豊富な者(大学卒業者、浪人等)に有利になったりはしないか、等の問題がある。また、55年度と56年度のような課題の場合は、その点は改善されても、逆に文章がパターン化して、表現力や論理性において差がつき難くなる。さらに57年度のように日常問題に近い課題の場合は、いわゆる作話と思われる文章があつて、適性をみるのにはあまり適していないのではないか、という意見がある。このような経過をたどって58年度の問題が出題され

たのであるが、資料を見ながら作文するとき、洞察力をみるのには適しているが、本来の目的の一つである国語力をみるという点からは大分離れて来はしないかという問題点もある。なお、全体を通して受験生は、漢字よりも「かな」を使って無難にしのごうとするなど、結構対策は練っているようである。また、点数の差はあまり開かず、学力検査の各科目との相関は弱い。この相関が弱いことは、むしろ論文が学力検査とは別の能力を検定しているとみれば意味のあることのように思われる。このように、出題形式については徐々に改善されているが、その評価方法については、④、A、B、Cというランク付けをして、C群は入学の対象にしないとか、④群については無条件合格とする等、素点評価よりは強い意味で合否判定資料に採り入れるべきだとかいった意見もある。しかし、大方は現在の方式で一先ず成功とみており、改善するにしても、入学後の追跡調査をもっと重ねてから、といった意見が大勢を占めている。

面接の問題点とその改善

面接については当初、医師としての適性を欠くものを検するということが狭義に解釈して、五つの項目に分けて予め定められた基準に基づいて評価し、

それを複数の面接者間での合議の上でA、B、C、Dにランク付けて、Dは排除資料とするというに止められている。しかし、各面接グループ内での面接者の評価内容を調べていく課程で、各面接者間に偏りはあまり見られず、面接評価は点数化が可能であり、その方向で方法等を検討することにしてはどうかという意見が年々多くなり、入選研でも56年からそのことを検討することになった。まず、各項目の評価が各グループ内だけでの相対評価に止まることを防ぐ意味で、受験者の質と受験番号順との関係等を排する方法を講じて、各グループとも受験生を均質化した。その一方で各グループでの点数を偏差値処理をするという試行を行い、入学後の成績、生活状況等を追跡調査することにより、最近漸くある種の点数化の方式を算出するに至った。この新方式の適用により、従来の方式によるものと比較して、合否の最終判定資料において数名の移動が予想される。しかし、この方式においてもまだ問題がないわけではない。先ず、面接者が十分訓練されているかということである。本学のように単科の大学では、熟達面接者を必要数だけ確保することは大変困難なことである。次に、時間的な問題がある。ごく限られた時間（1名当たり約7分間）に受験者の資質を将来にわたって見通すこと

は不可能に近いことである。将来、面接者を増やすとか、面接時間を長くするとか、集団面接をも採用するとか、調査書の記載内容をより詳しく求めるとか、小論文との関連をより密にするとかの方法を講じて、面接内容を充実していく必要がある。

むすび

本来、人間の能力には濃度依存型な面と時間依存型な面の2面性があるものとすれば、旧来の入学試験はともすれば学科試験等でその濃度依存型な面にのみ重きを置いていたきらいがある。本学の入選研の調査では。入学後、語学系・実験系等平常態度が重視される

いわば時間依存型な科目の評価は入学試験の点数よりもむしろ高校調査書の評点の方に強い相関を示していることが指摘されている。高校にいわゆる学校差があって、調査書の評点等が安易に入試の評価内容に加算できないという問題があるとすれば、小論文や面接でこのような面を評価できる方法がないか検討することは極めて有意義であると思われる。

本学では、以上述べたようにいろいろ模索をしながら入試の改善を続けているが、その際、他大学と情報交換等の協力をしていくことは欠かせないことであり、今後も入研協総会等に出席してその資料蒐集には努めていきたい。

